はじめに

藤川　美代子

１．刊行の経緯

本書は、南山大学人類学研究所主催の共同研究「定着／非定着の人類学――「ホーム」とは何か」（2016～2018 年度、研究代表者：藤川 美代子）の成果論文集である。

人類の進化史を考える時、考古学者の多くは長い間、「定住」の開始こそが人類を文明へと向かわせた最大の根拠であると理解してきた。その論理に従えば、人類史の大部分は定住したくともできなかった歴史であり、その間、人類は非定住を強いられていたということになる（cf. 赤沢 1984）。つまり、人類にとって遊動生活とは、淘汰されるべき生活様式なのだと。

翻って、現代とはどのような時代だろうか。20 世紀以降、人類の移動の範囲は日に日に拡大し、「グローバル化の只中にあって、国境を越えた移動さえも、もはや万人にとって日常的なものとなりつつある」との言説自体が、陳腐な響きを伴ってそこここにあふれ返るようになった。いわゆる現代人は、金銭（・希望）の獲得や危険（・絶望）からの脱却を求めて、あるいはやむにやまれぬ事情で、文明の利器であるところの様々な交通手段を用い、自分の村から隣町へ、町から都市へ、都市から他国へと、駆り立てられるように移動する。より日常的には、自宅から学校や仕事場へと、移動をくり返してもいる。その姿は、森や草原、海で、食料と安全を確保するために移動する「原始的な遊動民」（非定住民）たちと、私たち現代人の間に、果たして境界など存在するのだろうかと問いかける。

こうして、ジェイムズ・クリフォードが主張するように、現代人にとって「根なし」の状態は常態化し、「文化とは、ある土地に根ざした、混じりけのない固有のもの」との前提は、とうに捨て去るべき時を迎えている（クリフォード 2003）。とはいえ、その一方で、個人的な経験（ex.進学・転勤・出稼ぎ・結婚・病気・介護・借金からの逃亡・観光 etc.）や、社会的な経験（ex.不況・自然災害・原発事故・紛争・定住化政策 etc.）を契機として、望むと望まざるとにかかわらず展開される移動という現象の背後には、それがどのような種類の移動であっても、ある特定の土地・場所・空間に根を張ることに対する人々の意識（憧憬・憎悪・無関心）が存在することもまた、事実だろう。言い換えれば、人は移動しながら（あるいは、断固として移動を拒否しながら）、常に自らの居場所であるところの「ホーム」を求めているということに他ならない。

考古学や文化人類学を専門とする参加者から構成されるこの共同研究は、生活様式としての「定住／遊動・移動・放浪」や、居所選択をめぐる「定住／移住」、日常的に反復される「帰着／移動」、一過性の「停留／移動・旅」などを区別することなく、広義に「定着／非定着」と捉え、それらのはざまにある人々の生き方に注目しながら、最終的には人にとってホームとはいかなる空間（あるいは、空間ではない何ものか）であり、ホームを求める（あるいは、求めない）とはいかなる実践であるのかを考えることを目的として始められた。想

定されるホームは、①日々、帰る場所（生活空間としての居所、避難所、入院先の病院 etc.）、②登録された帰る場所（住民票・戸籍上の居所 etc.）、③定期的に帰る場所（単身赴任者にとっての家族の居所、実家、避難者にとっての自宅 etc.）、④そここそ、自らの帰るべき場所であると考えるような場所（故郷、祖国、村、墓・仏壇のある場所、移民を排出した母村、戸籍の籍貫＝祖先の出身地、死者の魂の行く先 etc.）など、さまざまな位相を含むものだったが、これらをすべて研究に値する重要なものと捉え、議論の俎上に載せることを目指した。

共同研究が射程に入れる「定着」・「非定着」・「ホーム」はいずれも多岐にわたり、参加者が関心を寄せる事例も多種に及ぶことから、研究会の運営に当たっては、共通の基盤となるような議論の枠組みを予め設定するのではなく、個々の事例に即した形で上述のテーマに関する議論をボトムアップ的に深化させていくこととした。したがって、本書に収められた論考は、筆者それぞれの視点から定着／非定着やホームをめぐる議論を整理・レビューし、共同研究会で話し合われたことを取り込みながら論を展開するという形をとっている。

２．所収論文の概要

渡部 森哉「人類の定住に関する考察――物質文化との関係に着目して」は、アンデス考古学の立場から、人類が定住するに至った要因を農耕への移行に求める従来の生業論から一歩先に進み、土地を掘り込んで住居や象徴物としての神殿を造るという行為が定住性を高めることになったとの論を展開する。こうして人間が特定の場で作り出した物質的痕跡が、自分の起源や他者に対する知的好奇心を創り上げる契機となると想定する渡部は、それこそが社会集団の規模を大きくすることに深く関連していると見る。つまり、よく言われるように定住の結果として社会集団の規模が増大したというのは誤りであって、人は他者とつながり、社会集団の規模を増大させるためにこそ定住したと考えることも可能である。ここから敷衍して、渡部はホームのあり様についても論じる。すなわち、現代人にとってホームとは巨大な世の中の一部を切り取るという形で設定されるため、社会の範囲を閉じる動きと説明できる。しかし、初期の定住生活が人口増大へと繋がっていったとすれば、むしろそこには他者を呼び込むような外に開いた力、そして集まった人々をつなぎ止める凝集的な力、求心的な力が働いたと見るべきであり、そこにあるレベルのホーム像を想定することができるというのである。

後藤 明「移動民のコスモビジョン」は、世界各地の事例を横断的に取り上げながら、移動性の高い多くの狩猟採集民や遊牧民と、相対的に定着性の高い農耕民や一部の狩猟採集民とでは、生活パターン・社会構造・宗教観念のみならず、天体のまなざし方が異なることを論じている。両者の差は主に、星と太陽のどちらの動きをより重視するのかという局面に現れる。これが重要と思われるのは、この差異が土地と人との関係の切り結び方と密接に関係しているからである。いわく、ある一定の範囲の土地に根を下ろし、固定的な家屋を建設して集住する後者は、集落の特定の場所から太陽や月の動きを観察して暦の作成に利用したり、太陽や月の位置を厳密に反映した儀礼用の施設を造ったりする。対する前者は、動物資源を追って広大な土地を移動しており、同じ時間帯に同じ地点から天を見つめることがないために、毎日くり返される太陽の見かけ上の動きを気にすることは少なく、星座の年間の動きに注意を払いながら季節や方位を知る手がかりとする。後藤の議論は最終的には、星

の配置というきわめてランダムな対象の認識・記憶のために、人は必ず「物語」を必要とし、それがある集団にとって時空間を認識する際の基礎となるという点に結実していく。

藤川 美代子「一所に根を張ることと、複数の空間に根を広げること――定住化後も水上・陸上を動きつづける中国の船上生活者とホームをめぐる実践」は、船という住まいそのものを操縦しながら水上と陸上に跨る複数の空間間を移動することを常態としてきた中国の船上生活者が、新たに手に入れた定住地と故地（＝広範な水域およびその周辺の土地）においてくり広げる実践に注目し、そこに「ホーム」と呼び得る複数の存在が交錯するさまを描く。福建省の連家船漁民は、①1950 年代後半から段階的に手にしてきた比較的浅い歴史しかもたぬ定住地の土地・共同体を自らのものとして受容する試みと、②定住地の空間からはみ出すようにして、過去約 400 年間で祖先たちがたどったとされる広範にわたる移住の歴史を回顧し、自らの帰属する空間・共同体を国家の境界外部へと拡大する試みという、一見すれば矛盾するようにも思える実践を展開してきた。藤川は前者を、連家船漁民が自らの意思とは無関係に図らずも手に入れることになった定住地の空間・共同体に根を張り、それらを自らのホームとして築き上げる実践と捉える。対する後者は、連家船漁民のホームが歴史的に見れば決して一所に根を張ることなく、水上と陸上の複数空間を自由に移動しつづけるその動態にこそ存在してきたことを示す。この例は、近代国民国家という特殊な時代の中で進行した「遊動民の定住化」の試みが、当事者にとっては「自らの故地の喪失」を意味するのみならず、「他者の土地の占拠・奪取」というためらいを伴うものとして経験されていること、そして定住地への再配置をもって完了するという性質のものではなく、常に現在進行の形を取りながら実践されつづけるものであることに目を向けさせるものである。

吉田 竹也「安らかならぬ楽園のいまを生きる――日本人ウブド愛好家とそのリキッド・ホーム」は、国境を越えて展開される移住・移動の経験とホームの関係性を扱うものである。自らが生まれ育った日本から遠く離れた「楽園」としてのバリの観光地（ウブド）に愛着を感じ、そこをホームの一部と見なしながら自分らしく心地のよい生のあり方を模索する複数の日本人の個別具体的な経験が描写される。吉田がバウマンの議論を援用しながら論じるのは、リキッド・ライフやモバイル・ライフが全盛となった現代人が、（古典的なホーム像が無反省に前提としていた）地縁・血縁・出生といった要素にこだわることなく、想像やイメージの次元で希求するものとしての、そして捕まえようとしてもすり抜けてしまうようなものとしての「リキッド・ホーム」である。本論に登場するウブド「愛好家」の日本人は、日本・ウブド・その他の複数の（地理的・社会的）空間で定着すること／定着しないことのはざま、ネーションやアイデンティティの面で日本／バリのはざま、そして「楽園バリ」のイメージ／現実のバリ社会のはざまを、相当な幅の中で揺れ動きつづけている。これらの揺れを引き起こす要因はきわめて個人的かつ現実的な事柄に彩られており、「現地の男性／女性との結婚を機に」とか、「あくせくした日本での生活を忘れさせてくれる楽園としてのバリへの傾倒」といった、誰でも容易に想像し得る月並みなものとはかけ離れた形で、そしてまさにリキッドな状態としか形容し得ぬ形で、ホームが希求されていく様が克明に描かれる。

野澤 暁子「フェズ世界神聖音楽祭の都市空間性――〈ホーム〉をめぐる音楽と共感の諸相」が取り上げるのは、湾岸戦争への反動を核に、モロッコの文化人類学者が「アブラハム的信仰」（キリスト教・イスラーム教・ユダヤ教）の共存を理念として 1990 年代半ばに立

ち上げたフェズ世界神聖音楽祭である。音楽を通して世界平和を訴えるこの祭典は、現代の高度情報化社会の中で超地域的・超宗教的・超民族的な参加を促しながら規模を拡大し、さらに世界で進む宗教対立の深化とともに同種の祭典を生み出していった。野澤が最初に言及するのは、歴史的に先住民ベルベル人・入植者としてのアラブ人・スペイン人・チュニジア人・ユダヤ人・フランス人・それぞれの富裕層と貧困層が居住区を隔てながらも混住し、長い時間をかけて精緻な文化を生み出してきたフェズという古都で音楽祭が開かれることの意味、つまり場所性についてである。興味深いのは、相対的に開かれた公共空間や相対的に閉鎖的な空間に設定された会場で演じられるさまざまな種類の音楽が演者や集まった観客の間に共感と一体感を生み出すという体感と、多様な信仰音楽と身体との交響を通じて参加者たちに「自己の外へと出て他者へと向かわせる新たな地平を開く」という音楽祭の理念の間に矛盾が生じながらも、この共感性をめぐる相反するベクトルのせめぎ合いこそが音楽祭にエネルギーを与えるという野澤の洞察である。野澤の議論は最終的に、音楽祭の複雑な会場を巡るという行為を民族・信仰の過去を尋ねる巡礼と重ねることで、この身体体験を伴う文化実践こそが祭典に集う者の間に「いま・ここ」における集合記憶を生み出していくという主張に帰結する。これは、ホームを「個人／集団のアイテンディティ構築の基盤となる想念的原郷」と理解するもので、吉田の論考とともに想像されるものとしてのホームの位相が見せる多様性をあぶり出してくれる。

菅沼 文乃「宮古島から那覇市への戦後移住に関する研究――辻・若狭に居住する移住経験者を事例とする調査報告」は、野澤とはまったく異なる事例を扱いながらも、ある空間に刻み込まれた歴史が醸し出す場所性とホームの関係に注目している。菅沼が取り上げるのは、古くから沖縄の玄関口として外に開かれてきた那覇港近くの辻・若狭という隣り合う二つの地域が、戦後になって県内の離島からの移住者を惹きつけ、そこに彼らの新たなホームが醸成されていく過程である。17 世紀に冊封使や上階級の武士を相手とする遊郭が設置され、戦後は戦禍による貧困を背景に急増した街娼と多発する米兵の性犯罪の問題を解決すべく米軍関係者向けの特殊飲食街として囲い込まれていった辻。一方の若狭は、戦前まで那覇市内最大の農耕地を誇っていたものの、戦後はやはり米軍関係者を相手にした飲食店・遊興店、そして辻歓楽街の客層を取り込んだホテル経営が活況を呈していく。1960 年代以降、両地域におけるこうした特殊飲食店・ホテル経営に参入した人の多くが宮古島出身者であった。菅沼が移住者たちの語りから汲みとるのは、彼らが当初、故郷の天災による農業不振や現金収入の必要性といった種々の困難を背景として辻・若狭へ一時的に「出稼ぎ」に来たはずだったものの、那覇での生活が長くなるに従い、次第に故郷から位牌や墓を「ひきあげ」る現象が見られるという、移住者たちの独特な言葉遣いに現れる故郷のホームと移住先のホームに対する感覚の機微である。さらに菅沼の洞察は、「ジュリ（遊女・娼妓）の街」辻が父系血縁原理の介在せぬ「人工の集落」であり、屋敷・土地・墓が継承されにくい構造をもっていたこと、そして辻・若狭が沖縄戦による焼失と米軍による地域の接収を経験したことへと向かい、これら両地域の（地理的・社会的）空間に刻まれた歴史性こそが宮古島からの移住者をこの地に根づかせることにつながったとの結論へと誘う。この場所性への注目が、移住者研究においては「離島から沖縄本島への移住」といったありきたりな物語に落とし込めて一般化を図ることよりも、送り出す側・受け容れる側双方の個々の土地に関わる微細な歴史をまなざすことのほうが大きな意味をもつという重要な事実を教えてくれる。

髙村 美也子「ボンデイ社会における女性の死後の移動」は、生家の屋敷・土地・家族・親族を離れて、婚家のそれらへと物理的・社会的という二重の意味で移動することを余儀なくされる女性たちが死後「帰る」場所への注目をとおして、他の論者とは異なる側面からホームの一つの位相に焦点化しようとする。タンザニア北東部の農耕民ボンデイの社会は基本的には父系制原理が機能しており、性別、未婚・既婚の別、信教の別を問わず、死者の遺体はその父親の元へと戻されて父方の祖先が眠る土地に埋葬されることになっている。しかし、信教によって一夫一妻・一夫多妻の別が生じるほか、男女ともに再婚をくり返したり、法的な強制力にもかかわらず複数のパートナーとの間に婚外子をもうけたりすることがしばしば発生するため、相対的に複雑な家族関係が現れやすく、死後の女性をどこに埋葬するのかをめぐる実際の選択は相当な幅をもつことになる。それはたとえば、夫と長く生活をともにして子をもうけた第一夫人は死後も子や孫・ひ孫に囲まれたいと夫方の祖先の土地に埋葬されることを望み、子をもうけなかった第二夫人は慣習に従って生物学的な父親の土地への埋葬を希望し、さらに子をもうけず夫方の家庭に居場所を見つけられなかった第三夫人は実母の介護を目的に実母の生家へと戻ったため、死後は実母の父方祖先の土地に埋葬されることを望んでいるといった具合である。反対に、この地に根づく父系制原理に従えば、婚外子の生物学的な父親は将来、その子を無条件に自らの祖先の土地へと埋葬させることが可能なはずなのだが、実際にそれを叶えるためには父が積極的に子に対する愛情を示すことが必要であるという状況も示される。髙村が示唆するのは、ボンデイ社会においては、生物学的な父子関係を重視する父系制原理のみならず、死者が（相当な揺れ幅の中で）生前に築いた特定の家族や土地に対する愛着関係が、死者の帰るべき場所を規定する際の重要な指標となり得るという重要な事実である。

Benjamin Dorman “Autism, Community Building, and Volunteering: A Personal Journey” は、Dorman が自閉症スペクトラムの長男 Lenney を中心とした家族の物語をオートエスノグラフィの手法で記述しながら、アメリカ（特にハワイ）と日本を股にかけた「旅」や、Lenney の多方面にわたる可能性を引き出すことを目指した医療・教育プログラムの開発と導入をめぐってインターネット上で展開されたクラウド・ファンディング、そして家族とボランティアの人々との間で協力体制が整えられていく過程がそれぞれ絡みあう形で、Lenney にとって新たな形のホームが生み出されていく様を描く。家族の物語は、オーストラリア国籍で日本在住の Dorman と日本国籍の妻の間に生まれ、早い時期に英語・日本の双方を習得して他者とも積極的な関わりを見せていた Lenney が言葉を失うところから始まる。Dorman 夫妻は幾人もの専門家に診断を仰ぐが、「様子を見ましょう」「彼はよくなるだろう」「彼はよくならないかもしれない」といった定まらぬ診断に戸惑い、一時的に日本を離れることを決意する。そうして訪れた先のハワイで、Lenney の症状には「自閉症スペクトラム」という名がつけられ、さまざまなセラピーと支援を受けるうちに Lenney は次第に言葉を取り戻していく。しかし、日本へ帰国後、Lenney は再び言語を失う。やがて、家族は Son-Rise Program®の存在を知り、講師を自宅に招いてプログラムを遂行するための資金をクラウド・ファンディングで募ることになる。これは、Lenney と家族の経験を他者に伝え、共感を得るために、それまでの経験を自己反省的に振り返り、未来の創造へつなげるための一つの「物語」を編んでいく過程でもあったろう。家族はこのプログラムをとおして Lenney に確かな変化が生まれたことを確信し、それを広く伝える活動を展開し

ている。Dorman の論考は、一つの家族が息子の置かれた状況に戸惑い、絶望と希望の間、日本の制度とアメリカの制度の間、そして、（明言はされぬが）普通と障がいの間を揺れ動きながら、しかし息子にとって居心地のよい空間を創り出すという共通の使命に向かって周囲を巻き込みつつ歩みつづける姿を克明に描き出すものである。

３．共同研究会の記録

2016 年度

第 1 回研究会　2016 年 7 月 20 日（水）

・藤川 美代子（南山大学人類学研究所）「定着／非定着の人類学――『ホーム』とは何か」

第 2 回研究会　2016 年 12 月 7 日（水）

・藤川 美代子「定着／非定着の人類学――『ホーム』とは何か」（理論的視座の再考）

第 3 回研究会　2017 年 1 月 13 日（金）

・後藤 明（南山大学人文学部）「オセアニアにおけるカヌー文化復興――『ホーム』を求める動き？」

・髙村 美也子（名古屋大学・当時）「アフリカ人の『帰るところ』ホームとは」（調査前の理論再考および調査の見通し）

2017 年度

第 1 回研究会　2017 年 8 月 3 日（木）

・吉田 竹也（南山大学人文学部）「安らかならぬ楽園のいまを生きる――バリ島ウブドの日本人のゆらぐホーム」

第 2 回研究会　2018 年 2 月 28 日（水）

・後藤 明 「『移動』を展示する博物館・海洋文化館をめぐる様々な『組織』」（人類学研究所主催共同研究「非営利組織の経営に関する文化人類学的研究」との横断的研究発表）

・髙村 美也子（南山大学人類学研究所）「農村社会の埋葬地――タンザニア・ボンデイ社会の被埋葬地の選択」

2018 年度

第 1 回研究会　2018 年 7 月 6 日（金）

・野澤 暁子（ミシガン大学／名古屋大学／南山大学人類学研究所）「神聖音楽祭の成立と展開――〈ホーム〉をめぐる音楽的プラクシスの諸相」

・渡部 森哉（南山大学人文学部）「定住に関する一考察」

第 2 回研究会　2018 年 10 月 22 日（月）

・菅沼 文乃（南山大学人類学研究所）「宮古島出身老年者の故郷観について」

・濱田 琢司（南山大学人文学部）「移動する職人――福岡県小石原の「廻り職人」を中心に」

第 3 回研究会　2019 年 1 月 14 日（月）

・ドーマン・ベンジャミン（南山大学人類学研究所）「オートエスノグラフィーと自閉症療育――コミュニティの構築とボランティア募集活動」

・ポール・カポビアンコ（アイオア大学／九州産業大学／南山大学人類学研究所）「日本の将来――移民、小さな国際化、アイデンティティについて」

参考文献

赤沢　威

1984　「『定住革命』へのコメント」『季刊人類学』15(1): 29-35。

クリフォード，ジェイムズ

2003　『文化の窮状――二十世紀の民族誌、文学、芸術』、太田好信ほか訳、人文書院。